

# 基礎ゼミナール

都市教養学部理工学系・助教授  
青塚 正志

## はじめに

「基礎ゼミナール」は首都大学東京の教養教育新科目として、開学に先立って基礎ゼミナール教育準備チームによって準備作業が行われた。本科目は、右に引用した、基礎ゼミナール教育準備チーム資料の1、2で示されているように、受講生に受動的な学習姿勢から能動的な学習姿勢への転換を促し、課題解決に必要な技法を体験的に修得させ、所属を異にする学生が議論や共同調査・研究を通じて多様な価値観を認識することを促し、その結果として豊かな人間関係が育成されることの重要性を認識させる、という趣旨・目的を担った一年次生前期必修の科目である。このような趣旨・目的は、「基礎ゼミナール」ならずとも大学教育におけるどのような講義科目にも当てはまる、教育効果の向上のための重要な方向であると思われる。しかし、一般の科目においては、基礎知識の解説から始まり、各学問分野における高度な知識と問題解決能力を兼ね備えて、将来多種多様な場面で活躍できる人材を育成することが第一義的な目的であり、「基礎ゼミナール」の趣旨・目的を前面に押し出している授業実践は難しい。それゆえ「基礎ゼミナール」という新科目の開講は、意義深いものと思われる。学生にとって、入学してすぐに「基礎ゼミナール」において高等学校までとは異なった学習姿勢の重要性を認識することができれば、それは後の勉学への大きな力となるに違いない。

「基礎ゼミナール」は実際には2つの部分から構成される。基礎ゼミナール教育準備チーム資料1に趣旨が記されているように、学生は最初に、大都市の大学で学ぶ者として、都市が抱えるさまざまな課題を認識、理解することをねらいとした「都市文明講座」を受講する。その後、少人数の「基礎ゼミナール」クラスに分かれて、担当教員が設定したテーマに基づいて前述の趣旨・目標の達成を目指す。

「基礎ゼミナール」の趣旨・目的の達成が大学教育の向上に寄与するであろうことは、すべての教員にとって異論が無いものと想像する。しかし、教員が初めて担当経験する科目であり、やむを得ないことではあるが、初年度H17年の「基礎ゼミナール」は「試行錯誤に終始した感がある。その試行錯誤は、それぞれ7月と12月に実施されたFD委員会による「基礎教育に関するアンケート



調査」と「全学共通科目に関するアンケート調査」での学生からの、必ずしも満足度が高くはない評価結果に如実に反映された。また、クラス決定法、クラス受講者数、時間割配置などの実施形態についても受講生、担当教員の双方から多くの意見・不満が寄せられた。

基礎教育部会の下に組織された基礎ゼミナール部会では、学生アンケート、担当教員から聴取した意見、感想を基に、問題点を絞りこみ、改善に向けての検討を開始した。

## 初年度（H17年度）「基礎ゼミナール」の問題点

### 1) テーマ（クラス）決定法

学生は、シラバスに記されたテーマ、内容をもとに、興味あるクラスを第一希望から第五希望までを選択し、申請する。少人数制ゼミ形式ということから、クラスあたりの受講者数には制限があり、すべての学生の第一希望が満足されないが、本年度は、なるべく学生の希望を叶えることを基本に、28名をクラス受講生の上限に設定し、その一方で、下限を設定せず、数名であっても第一希望の学生がいればその人数で開講することにした。それでも、受講者総数1,612名のうち、412名（26%）の学生が抽選によって第一希望クラスから漏れてしまい、第二回申請以降で第二希望以下のクラスに割り振られることになった。

学生からは、

- ・希望のテーマを受講できず不満。
- ・仕方なく選んだテーマではやる気が無くなる。

- ・抽選ではなく全員が興味あるテーマで学べるような仕組みを考えてほしい。

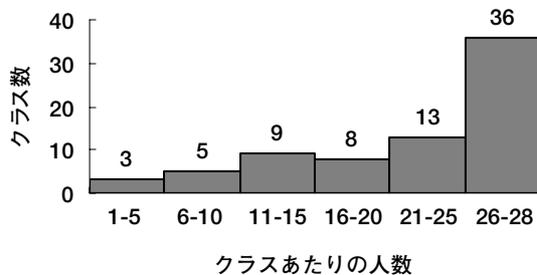
といった不満が寄せられた。

## 2) クラスあたりの受講者数

受講生のテーマ選択希望をできるだけ叶えるというクラス決定方針は、反面、クラスあたりの受講者数についての不満の原因となった。本年度は、下図に示すように、開講クラスの半数以上が26-28名、その一方、8クラスが10名以下の少人数クラスという分布になった。その結果、学生、教員の双方から、

- ・受講者数が多すぎたため、ディスカッションやプレゼンテーションができなかった。
- ・少人数すぎて、ゼミ形式にならなかった。

といった、両方向からの不満が多く提出された。



## 3) 時間割配置、開講クラス数

開講初年度のH17年度は、月、火、金、各曜日の5時限（16:20-17:50）に、総数74クラスが配置された。この時間割配置について、特に学生から強い不満の意見が聞かれた。

- ・週に3日しかなく、履修計画が立て難い。
- ・5時限では遅すぎる。
- ・教職科目、他の必修科目とバッティングしており、興味ある「基礎ゼミナール」のクラスを履修することができない。

## 4) 「基礎ゼミナール」の内容についての不満

学生アンケートの自由意見記述欄には、下に紹介するように、「基礎ゼミナール」の実施内容と担当教員への多くの不満が記されていた。受講生は、担当教員の試行錯誤を敏感に察知したのかもしれない。

- ・無意味。必要性を感じない。つまらない。
- ・得られたものが少ない。
- ・教員の自己満足。
- ・教員の求めていることがわからない。
- ・教員は手探り状態だった。
- ・担当教員の当たり外れ。
- ・クラスによってレベルがさまざま。

## 基礎ゼミナール

ねらい

- ・受動的学習姿勢から能動的学習姿勢への転換
- ・課題解決に必要な技法の体験的習得
- ・豊かな人間関係の形成

授業内容

表現力やプレゼンテーション能力を向上するための調査、口頭発表、レポート作成などの実施と、多様な価値観の認識や豊かな人間関係の形成を促すための共同研究や討論を中心とした授業。方法については、各教員がテーマに応じて計画。

第1回基礎ゼミナール教育準備チーム会合  
(2004.7.28) 資料2から抜粋

基礎ゼミナール（導入プログラム）の概要について  
(中間報告)

ねらい

新大学は、大都市東京の大学の使命として、大都市における人間社会の理想の追及、具体的には、都市環境の向上、ダイナミックな産業構造を持つ高度な知的社会の構築、活力ある長寿社会の実現を目指す。これらの使命の実現に向けた人材育成として、大都市が抱えるさまざまな課題に果敢に取り組み、社会に貢献できる人材を育成していくことが必要であり、そのためには、学生が自ら問題を発見し、それを解決していく能力を磨いていくことが必須である。

新大学では、高校までの受動的学習姿勢から、自ら問題を見出し、その解決のための知識や情報を自ら収集し、自ら思索するという能動的学習姿勢への転換を促し、大都市で活躍する人材に必要な問題発見能力及び課題解決能力を育成するため、「基礎ゼミナール」(導入プログラム)を導入する。

第1回基礎ゼミナール教育準備チーム会合  
(2004.7.28) 資料1

- ・納得できない成績評価。

一方、担当教員から寄せられた感想、意見では、ゼミナール実施における多種多様な工夫が紹介され、熱意を持って新科目に取り組んでいただいた様子がうかがわれた。しかしその反面、

- ・期待したような学生からの反応が得られなかった。
  - ・所属の異なる学生が集うゼミナールをスムーズに進行させることの難しさを痛感した。
- 等の挫折感を感じた教員も多かった。

## 5) 教室、設備、機器使用、サポート体制

基礎ゼミナールは、首都大学開設に伴って建設された

新棟（6号館）の小教室（28名～33名）で実施された。前述のように28名を上限としたクラス編成を行ったために、28名教室で28名の受講生では狭く、グループ討論等で机配置を変更するのが困難、といった不満が寄せられた。また、資料のコピー法、PCの借り出し、授業補助者の活用法などについて、十分な案内がなかったため、それらについての担当教員からの不満も多くあった。

#### 基礎ゼミナール開講クラス数

曜日	開講クラス数	
	H17年度	H18年度
月(5時限)	28	21
火(5時限)	20	16
水(4時限)	—	18
金(5時限)	26	22
合計	74	77

これらの問題点を出発点として、基礎ゼミナール部会では次年度基礎ゼミナールの改善に向けての検討を行った。

#### H18年度「基礎ゼミナール」向けの改善

クラス決定法、クラス受講者数、開講数、時間割配置についての問題点は、これらの項目が互いに密に関連しているだけに、改善具体策の決定は難問であった。すべての学生が第一希望でゼミナールを受けることができ、適切な受講者数で充実したゼミがおこなわれ、申請のための自由度を可能な限り拡大するために多くのクラスをすべての曜日に均等に配置すること、が理想的だが、当然ながら不可能である。また、例えば、学生の第一希望を叶えることと、クラスあたりの受講生数を適切に設定することは、両立し得ない。学生、教員からの批判、不満項目改善の検討では項目に優先順位をつけざるを得なかった。

基礎ゼミナール部会では、学生のクラス選択の自由度を増すための改善と、適切なクラスあたりの受講者数のためのクラス決定方式の検討が第一に重要であると判断した。幸い、基礎教育部会等での検討によって、水曜日4時限枠での基礎ゼミナール新規開講が決定した。基礎ゼミナール部会ではこれを受けて、開講クラス数増の方向で調整に入り、最終的に上表に示した開講数、曜日配分を決定した。各曜日の開講数を可能な限り均等にすべく調整に努力したが、なお偏りがあり、課題として残された。

開講曜日、開講クラス数の増は、学生の選択の幅を広げ、その結果としてクラスの受講者数の偏りが幾分改善されることが期待されるが、H18年度のコース新設に伴う学生増を加味すれば、効果は薄いと思われた。そこで

基礎ゼミナール部会では、クラス決定方式の変更によるクラスあたりの受講者数減を実現する方針を決定した。上限を本年度の28名から25名程度に引き下げ、さらに極端に受講生の少ないクラスを作らないことにした。この改善策と、学生の第一希望をできるだけ叶えるという本年度の方針とは、180度方向が異なり、学生から本年度にも増して希望のクラスに入れないことへの苦情、不満が噴出する危険性もある。

この改善策の決定は、突き詰めた言い方をすれば、学生からの、受講者数が多い、あるいは極端に少ないという不満と、第一希望のクラスに入ることができなかったという不満のどちらが、担当教員の熱意、努力によってより解消可能かの「見通し」の選択であった。基礎ゼミナール部会では、第一希望での受講が叶わなかったという学生のモチベーションの低下は、半年間を通じて適切ではない受講者数から受けるストレスおよびゼミナール実施内容の制限（議論、調査研究が行われないなど）に比べれば、解消される可能性が高いとの「見通し」を採択した。

本年度の「基礎ゼミナール」は、担当教員の試行錯誤のうちに終了し、そのために学生から多くの批判があったことは前述した。クラス決定方式を変更する次年度は、本年度以上に担当教員の力量が試されることになる。基礎ゼミナール部会では、基礎教育センター教務課の協力を得て、教員の「再挑戦」を支援するために、次年度のゼミナール担当者に「担当者への手引き」を配布することにした。

「手引き」には、教員が基礎ゼミナールをスムーズに実施できるように、教室備え付けの設備（スクリーン、ビデオ、DVDなど）の使用法、ノートPCの借り出し法、コピー機使用案内、授業補助員活用のための案内などを盛り込んだ。「手引き」ではまた、担当教員に基礎ゼミナールが他科目とは異なった趣旨・目的を担っていることの再確認をお願いし、それとの関連で、他科目とは必ずしも成績評価基準が同一ではない場合があり得ることを伝えた。さらに、所属の異なる学生が集うことを前提としてのゼミナールの実施をお願いした。「手引き」の後半部分には、基礎ゼミナール部会で聴取した本年度担当教員からの感想、意見、工夫および、H17年度教育改善傾斜配分「理工系基礎ゼミナールの総括と次年度の展望（代表：鈴木徹教授）」からご提供いただいた都市教養学部理工学系の基礎ゼミナール担当教員からの声を紹介し、次年度担当の参考になることを期した。

本年度は、「基礎ゼミナール」の趣旨が担当教員に完全に浸透していたとは言いがたく、そのためにシラバスの中には不十分、不適切と思われるものもあった。そこで、次年度担当教員には標準的と思われるシラバスを例

示して、シラバス作成への十分な配慮を求めた。さらに「基礎ゼミナール」のシラバスを別冊にして、学生のクラス選択の際の便宜をはかることにした。「基礎ゼミナール」の改善には、教員だけではなく学生がその趣旨・目的を理解することも重要であり、それを別冊シラバス冒頭に明記した。

学生の「受動的な学習姿勢から能動的な学習姿勢へ」、を期する「基礎ゼミナール」の趣旨・目的は、全国のどの大学においてもその達成を問われている重要課題である。すでに多くの大学において、ゼミナール形式の科目が開講されている。しかしそれらの多くが、各専門カリキュラムの中で提供されているもので、首都大学で開始された全学共通科目としての「基礎ゼミナール」とは一線を画する。専門を異にする学生が集い、討論し、共同研究・調査を行うことによって、多様な価値観の認識を期するという目的を含むものは、本学以外の類似ゼミナ

ールにはほとんど見受けられない。それだけに本学の「基礎ゼミナール」はユニークでかつ意義深いものであるに違いない。しかし反面、このユニークさは、担当教員のより大きな力量を要求することになる。本年度担当教員からの「異なる学生が集うゼミナールをスムーズに進行させることの難しさを痛感した」という感想にそれが現れている。「基礎ゼミナール」の趣旨・目的を、言うは易く、行うは難い、で止まってしまわないよう、私たちは努力していかなければならない。

次年度にはFD委員会による「基礎ゼミナール」個別評価が実施される予定である。基礎ゼミナール部会では、その結果から、改善方向が妥当であったか否か、学生、教員の双方に本科目の趣旨・目的が浸透しつつあるかなどを詳細に分析、検討していく予定である。